

〈論文〉

## 日本における武術の変容と理想の境地に関する一考察

瀧 元 誠 樹

【キーワード】 武芸、武道、BUDO、無敵、生きるための叡智

### 1. はじめに

最もグローバル化した文化と言えるスポーツにおいて、その最たるものはオリンピック大会であろう。2020年の東京オリンピックでは、柔道に続いて日本発の競技として空手が採用される。2016年8月に開催された国際オリンピック委員会（IOC）総会で、第32回オリンピック競技大会での追加競技として空手が採用された<sup>1)</sup>。そのために、複数あった空手の国際競技団体は統一され、ルールも共通化されることになった。そのおかげで、世界中の空手愛好家たちが同じ基準で競い合うことができるようになる。合理的で、画一的な基準が定められることで、観戦者にとってもわかりやすく、誰でもが楽しめるものとなる。だからこそ、空手はオリンピック競技としてふさわしいものとなる。

しかし、世界空手連盟に187の国や地域が加盟<sup>2)</sup>してオリンピック競技化する一方で、日本国内では伝統空手として4大流派が数えられるなど特色ある技の伝承を個別に行っている現状がある。空手の起源である「琉球の手」（沖縄の武術の意味）は、集落や著名な使い手ごとに練習体系や型が違っていた。それが、別々の流派の特色として現在も存在しているのである。空手は、競技スポーツとして普遍的な組織とルールによってグローバル化した一方で、伝統的な特色を残したローカルな文化としての側面も併せ持っている。

また、視点を変えてみると、柔道や空手のような競技スポーツとしてではなく、グローバル化している日本の武術がある。19世紀後半にヨーロッパで流行するジャポニズム、1900年にはアメリカで『Bushido The Soul of Japan』（新渡戸稲造）の刊行<sup>3)</sup>、1925年

には欧米向けの映画『武士道』<sup>4)</sup>の公開など、日本文化としての武士像は世界で注目されてきていた。そして、21世紀になるとCool JAPANのコンテンツとして「SAMURAI」や「NINJA」が発信されている。ところが、「SAMURAI」や「NINJA」の行う武術は、今ではほとんど継承されていない。にもかかわらず、作品中のイメージだけが広まり、世界的な人気を誇っているのも事実である。

さて、日本の公教育では2012年から中学校保健体育領域において武道が必修化されている。その趣旨は、「国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視」し、「諸外国に誇れる我が国固有の文化として、歴史と伝統のもとに培われてきた武道を取りあげ、その特性を活かした指導が出来るように」するためである<sup>5)</sup>。ところが、現在、学校で教えられている柔道と剣道は、伝統文化としての武道よりも、競技スポーツとしての武道であるように感じる。

このように、オリンピック競技として世界で親しまれている武術があれば、日本の歴史と伝統の下に培われてきた文化としての武術もあるように、武術の普遍化は二極化が進行している。

それでは、日本の武術は、どのようにしてグローバル社会の中で変容してきたのだろうか。本稿では、まず、国際社会の中で変容する武術の姿を、武芸と武道、BUDOの3つにまとめて概観する。そして、それぞれの武術において通底する理想の境地を描き出す。

## 2. 日本の武術の歴史的変容

### 2.1. 戦のない時代に成立した武芸文化

「SAMURAI」の語源は、「仕えるもの」であり、もともとは天皇や貴族に護衛として仕えた職業の人々を指した。よって、「SAMURAI」は日本における官人の身分呼称であり「武士」とも同意義である。1185年に初めて武人が政権をとった鎌倉幕府以降、1867年の近代国家の幕開けである大政奉還（江戸幕府が政権を天皇に返還した）までの680年余りの間、日本では武士が政治・経済・文化の中心にいた。

16世紀にポルトガルを通じて鉄砲が日本に伝わると、弓矢や槍から銃を使った戦へと変化する。その後、戦国期を経て、江戸時代の太平の世を迎える。1637年の島原の乱以降、幕府や藩との間で戦のない時代が200年あまり続いていた。実は、現在に継承されている武術は、戦のない江戸時代になって生み出されたと言ってもよい。武士は、地域の風土に合わせた独特の武術を考え出し、長い時間をかけて研鑽して多様な武術を成立させた。そして、藩校や道場にて、師範が弟子たちに教えるようになる。

ただし、その武術は当時から「役に立たない」とか、「技の見事さばかりが求められている」などと批判されることもあった。例えば、荻生徂徠は『鈴録』<sup>6)</sup>にて「剣・槍・弓・馬術が戦場の用から離れ、見事に勝事を第一にし、立ちまわり、所作の見事なるを専らとする」と述べている。目立った戦はなくなり、武術は実戦を離れ、技芸に走る傾向が見られたために批判された。とはいえ、太平の世だからこそ、じっくりと身体技法が錬られて今日につながる伝統文化としての武芸が創始され、伝承されたとも言えよう。こうして地域色豊かな武芸文化が生まれたのである。

1853年、アメリカの軍艦を引き連れてペリーが浦賀に来航する。それ以降、日本は欧米の軍事力の脅威にさらされる。それまでの武芸では太刀打ちできない状況となり、近代的な欧米式の軍備を整える必要性が出て来た。明治維新以降、富国強兵政策の下で武士階級はなくなり、徴兵令によって新たな軍備が進められた。文明開化の波は、当然武術界にも押し寄せてきた。剣よりも銃や大砲が導入され、個人の力よりも集団の力が求められる。大日本帝国という国家体制を改めて作り直すことになり、日本の武術は実戦において古くて役に立たないと否定され、新しい欧米式の軍事力が普及されたのである。

## 2. 2. 統一的な組織のもとで創始された武道

1896年に、大日本武徳会が創設される。その意図は、武道の精神は古来より和魂の美、すなわち武徳を涵養するためであり、毎年祭典を挙行し、武道を講演することを目的としていた。その武道には、剣術と柔術が主に採用された。1905年、大日本武徳会は後継者や学校における教員養成のために武術教員養成所を設立し、武術の伝承・普及に力を入れる。

柔術で中心となったのは、嘉納治五郎が1882年に創設した講道館柔道である。嘉納治五郎は、教育熱心でスポーツ科学にも通じ、英語も堪能で早くから柔道の世界普及まで考えていた人物である。さらに嘉納は、日本人初のIOC国際オリンピック委員会委員でもあった。嘉納は、柔道は世界に通じる優れた身体技法であり、この身体技法を通じて子どもたちを精神的、道徳的にも鍛えられると考え、人を殺める技術ではなく、人の生きる道を説く柔術としての講道館柔道を創設したのである。

大日本武徳会での剣術は柔道のように新しく創られた組織も体系的な技法もなく、江戸時代からの剣術流派・組織が存在したので主流派の技を集約しながら統一的なものを創りだした。

大日本武徳会とは別に、統一的な武術をまとめていったのが学校教育だった。学校体育にて武術が利用できるかどうか、その有用性が図られる。学校体育での武術の採用に慎重

であった永井道明は、精神を重視した心身鍛練実現のために「武術から武道」への変容を説いた<sup>7)</sup>。そして、1915年に東京高等師範学校において体操・柔道・剣道の3コースからなる「体育科」が設置された。1919年に前述の武術教員養成所が武道専門学校と改称したことから、この時期に「武道」という用語と概念が創られ普及していくことがわかる。

1931年、中学校令施行規則改正により「武道」が必修化する。ここでは、武道のうち剣道および柔道が体育において必修とされ、剣道および柔道は我が国固有の武道にして、質実剛健なる国民精神を涵養し、心身を鍛練するに適切なことを認め、両者またはその一つを必修にするとしていた。ここで言う「国民精神」とは、軍国主義政策下の精神であることに注意しておかなければならない。「武道」は、戦時色の強い政策下において有益であることを謳うかたちで創られたものである。すなわち、武術の精神が軍国主義に利用されたのである。だからこそ、1945年に戦争が終結すると、民主化政策が進められる中で、武道はその活動を禁止されたのである。

### 2. 3. 国際競技スポーツとしての BUDO

第二次世界大戦後の民主化政策下で武道は活動禁止された。しかし、柔道はいちはやく競技スポーツとして活動が認められるようになる。というのは、嘉納治五郎が当初から心身の育成に主眼を置き、競技スポーツとして柔道を世界に普及していたことが功を奏したと言えるだろう。1948年にはヨーロッパ柔道連盟が結成されている。全日本柔道連盟は1949年に設立され、競技スポーツの統括団体である日本体育協会へ加盟している。そして、1950年には、GHQの許可を得て柔道が競技スポーツとして学校体育で採用される。すると剣道も競技スポーツとしての活動を選ぶ人たちが現れ、全日本<sup>しな</sup>柔道連盟が創設された。1951年にアメリカを中心とする西側諸国との間で「日本国との平和条約」が締結される。すると、日本の文化活動は許され、剣道は活動が再開できた。

柔道は、1964年の東京オリンピック大会で競技として採用されて以来、名実ともに国際競技スポーツの仲間入りを果たすことになる。1970年には国際剣道連盟（International Kendo Federation）が設立し、世界大会も開催される。武道は国際競技スポーツとしての BUDO として世界に広まっていくのである。

### 3. 武術における理想の境地

これまで述べてきたように、日本の武術は歴史的背景を映すように変容してきた。次に、これらの武術に通底する理想の境地について、江戸時代の武芸者であり、思想家でもあつ

いっさいちゃん  
た佚斎樗山の言葉を繙き、探っていきたい。

佚斎樗山は、武士としての労務から隠居したのち自分の孫たちに向けて武術の神髄をわかりやすく説くため物語をつくっている。その一つとして、猫たちに立ち合いの本質を語らせているのが『猫の妙術』<sup>8)</sup>である。

ある屋敷にどうにも手に負えないネズミが出現し、ネズミ捕りの修行を積んだ3匹の猫が捕獲を試みるのだが、ことごとく失敗してしまう。第一の猫は、俊敏性のある若い猫で、どんなネズミでも捕まえられる技と俊敏性を備えていた。第二の猫は、大柄で気の力が強く、どんな猫でも睨みをきかして身動きできなくさせて捕えていた。そして、第三の猫は、技も気も磨いてきたうえで敵対心を隠し、和する心をもってどんなネズミでも引き寄せ捕まえてきた。それなのに、3匹の猫には、件のネズミはどうにも手に負えなかった。ところが、その後に登場する古猫は何をするでもなくネズミに近寄るとパクッとくわえてきてしまった。

そこで、3匹の猫がその技の妙を教えてもらうのである。古猫は、黒猫には自分の想定外のネズミに出会ったため、虎毛の猫には必死となって起きる気は意識的に使いこなす気に勝ることがあるため、灰毛の猫には自分の思いによって和しようとしたので自然の感が塞がれたために、それぞれ失敗したのだと諭した。わずかでも意識して立ち合えば、みな意識的行為となってしまう自然体ではなくなってしまう、それでは未熟であると。

たとえば、相手からのアプローチがあって技は起こる。構えが整っていれば、意識して攻撃を受けるのではなく、相手の攻撃によって受けさせてくれるようになる。技を行うのではなく、接触によって技が生まれるという感覚である。本来、相手は何をしてくるのかわからないうえに、相当の速さと攻撃の質をもっているのだから、あらかじめ想定したとおりに意識して受けられはしない。だから、相手からのアプローチに反応するからだを準備して、技が起こるのを待つしかない。無意識が働き始めるようなからだの状態を正確に準備しておく、と、技が生まれてくるのである。

佚斎樗山は、『天狗芸術論』<sup>9)</sup>で「勝負は応用の跡なり」と説いていた。一所懸命に稽古を積んで心身を鍛錬し、できる限り多くの技を習い、差異のある反復を行っていく必要性を説いた。そして、自然体になれたとき、本当の意味で臨機応変にからだが応答してくれると述べている。意識的に正しく技を修得し、無意識が働き始めるように準備して臨むと、勝負の結果は技の痕跡において感じられるというのである。

武術における理想の境地とは、百戦錬磨で向かうところ敵なしという強さの事ではない。そうではなく、敵を想定することなく、意識してコントロールする自己も無くしたことから生まれる、敵も我もない状態としての「無敵」なのである。

#### 4. 結論：生きるための叡智

武術は、地域や歴史を問わず人間の営みの中で培われてきた文化である。人間の歴史は、戦の積み重ねによって塗り替えられてきたとも言える。すると、その中心的な技術として武術は位置づけられる。また、人間の営みの中で、人々は多く移動＝旅をしてきた。旅の目的は、狩猟採集や信仰、交易、戦などさまざまであろう。その旅の過程において危険な目に遭遇するだろうから、それ相応の護身術を身につけなければならなかった。数多くの技を修練しそれ相当の段階にまでいたれば、その技のエッセンスが集約され、無駄は省かれ、ニュートラルな状態へと身体は変容する。技を一つ一つ身につけていったとき、そこには鍛え上げられた頑強で固定的な身体があるのではなく、どのようにでも対応可能な柔らかな身体があらわれる。そして、相手や自然の状況を察知する感性が磨かれている。

したがって、武術は、旅や戦争、多彩な自然環境などのフィールドにおけるアクションを通じて獲得された「生きるための叡智」として培われた文化なのだと言いたい。だからこそ、競技スポーツであれ、武芸文化であれ、武術する身体には生気が溢れているのである。

ここには、近代の推し進めてきた主体がコントロールし、理想的な「身体＝作品」<sup>10)</sup>へと改良する手段としての武術ではなく、生きる主体を問いたず機会となる武術がある。

しかし、武術は、歴史的に殺傷の殺戮の技術として使用されてきたことから、負の遺産を背負っている。武術の培ってきた身体技法の追求と可能性は、生き抜く技術と人を殺める技術としての二面性を持つということは、武術を志すものとしては常に注視していかなければならない。

そして、科学技術と医学の進展によってもたらされた「不死」<sup>11)</sup>の時代において、武術をする意義は何かという現代的問題点が浮かび上がってきた。これについては、2020年8月に国際スポーツ史学会と日本スポーツ史学会共催のシンポジウム「『不死の時代』に武術を継承する意義を考える」で問題提起し、さらに考察を深めたい。

最後に、本研究は、札幌大学から平成30年度に受けた研究助成による「武術のグローバル化に関する研究 ―伝統武術における現代的問題点の日中比較―」の成果の一部である。日本における「生きるための叡智」としての武術という視点は、杭州電子科技大学の李国冰先生や惠州学院の庄婕淳先生から、中国武術のグローバル化を考えるに有益だと同意を得た。両氏には、研究におけるアドバイスだけでなく、本稿の中国語訳作成にあたって大いに助けていただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。

## 注および参考文献

- 1) 公益財団法人全日本空手道連盟サイトより  
<https://www.jkf.ne.jp/topics/news/20160804/8821>
- 2) 世界空手連盟サイトより2019年の加盟国地域数。  
<https://www.wkf.net/>
- 3) 新渡戸稲造著、谷内原忠雄訳『武士道』岩波文庫1938年
- 4) 『武士道』監督 H・K・Heiland、賀古残夢 東亜キネマ配給  
日本映画データベース[www.jmdb.ne.jp/1925/ba004970.htm](http://www.jmdb.ne.jp/1925/ba004970.htm) 5) 「体育学習における武道」  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/jyujitsu/07121717/001/001.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/07121717/001/001.pdf)
- 6) 今中寛司、奈良本辰也編『荻生徂徠全集第6巻』河出書房新社1973年
- 7) 永井道明『学校体操要義』大日本図書1913年
- 8) 佚斎樗山著、石井邦夫訳注『天狗芸術論・猫の妙術』講談社学術文庫2014年
- 9) 同上書
- 10) イザベル・クヴァル「スポーツ選手の身体の『自然』と『超自然』」ジャン＝ノエル・ミサ、パスカル・ヌーヴェル編、橋本一径訳『ドーピングの哲学 タブー視からの脱却』新曜社 2017年
- 11) 西谷修『不死のワンダーランド』講談社学術文庫1996年

## 中文译文

### 1. 序论

体育运动可以说是最全球化的文化，而其中最具代表性的，便是奥林匹克运动会吧。作为日本原创的竞技项目，2020年的东京奥林匹克运动会在继柔道之后，将采用空手道作为竞技项目。2016年8月召开的国际奥林匹克委员会总会决定采用空手道作为第32届奥林匹克运动会的新增竞技项目。为此，现有的多个空手道国际竞赛组织统合成一个，规则也得到统一。得益于此，全世界的空手道爱好者可以在同一比赛规则下进行竞技。合理且统一的比赛规则，有助于观众观看并欣赏比赛。而正因为如此，空手道成为符合奥林匹克运动会要求的竞技项目。

然而，随着187个国家或地区加盟世界空手联盟，使其奥林匹克竞技化，日本国内还有可称为四大流派的传统空手道，独自进行有特色的技艺传承。空手道的起源“琉球之手”（指冲绳武术）因村落和名手不同，学习体系和形式也不同。这一现象作为不同流派的特色，现在依然存在。空手道既有作为竞技体育因统一的组织和比赛规则而全球化的一面，也有作为保存传统特色的当地文化的一面。

并且，换一个角度来看，在作为竞技体育项目的柔道和空手道之外，还存在着另一种全

球化的日本武术。19 世纪下半叶欧洲流行的 JAPONISM 日本趣味,1900 年在美国出版的《武士道》(新渡户稻造),1925 年面向欧美上映的电影《武士道》,使日本文化中的武士形象得到了全世界的瞩目。而之后的 21 世纪传播的是“酷日本 Cool JAPAN”的主要内容,即“SAMURAI 武士”“NINJA 忍者”。而“SAMURAI 武士”“NINJA 忍者”的武术几乎没有流传到今天。但即便如此,作品中的形象广泛传播并得到世界性的欢迎也是事实。

此外,日本的公共教育从 2012 年开始在中学保健体育领域中将武道列为必修科目。其主旨为,为了“加强国际理解,重视培养尊重我国文化与传统的态度”,“取足以向外国夸耀的我国固有文化之一,在历史与传统中形成的武道,活用其特点,进行指导”。不过,个人感觉,现在学校教授的柔道和剑道偏向于竞技体育而非传统文化。

综上所述,既有作为奥林匹克竞技项目在世界范围内传播的武术,也有在日本历史与传统中形成的文化之一的武术,武术的普及也有两极分化。

那么,日本武术是怎么在全球化社会中演变的呢?首先,本论文将国际社会中武术的演变概括为武艺,武道,BUDO 三个概念进行概观,然后再解析不同武术中共同的理想境地。

## 2. 日本武术的历史变迁

### 2.1 和平年代产生的武艺文化

“SAMURAI 武士,侍”的语源来自于“侍奉之人”,原指从事天皇或贵族护卫之职的人。因此,“SAMURAI 武士,侍”与日本官僚的身份称呼“武士”是同义。从 1185 年武人最初掌权的镰仓幕府到 1867 年近代国家的开幕的大政奉还事件(江户幕府将政权归还天皇)为止的 680 多年间,武士是日本的政治,经济,文化中心。

16 世纪大炮经葡萄牙传入日本后,战争的形式由使用弓箭长枪变为使用火枪。之后经过战国时代,日本迎来了江户时代的太平天下。1637 年岛原之乱后,幕府和藩 200 多年没有战争。实际上,现代传承的武术可以说是进入没有战争的江户时代之后才产生。武士们想出了适合当地风土的独特武术,经过长时间的钻研,创造了多种多样的武术。而后,师傅在藩校或道场将其教授弟子。

但在当时,武术也遭到了“无用”,“只追求招式的美观”的批判。例如,获生徂徕在《铃录》中,说到“剑,枪,弓,马术脱离战场之用,以赢得漂亮为第一要务,专注于旋身和招式的美观”。没有大的战争,武术脱离实战,偏重招式的倾向遭到了批判。虽说如此,但可以说正因是太平天下,技艺才能得到精心琢磨,流传至今的传统文化之一的武艺才得以创立并传承。由此,带有浓厚地方特色的武艺文化诞生了。

1853 年佩里率领美国的军舰来到蒲贺。此后,日本面临欧美军事力量的威胁,之前的



武艺已不足以应对，必须整顿近代化欧美式的军备。明治维新之后，在富国强兵的政策下武士阶级已经消亡，新的军备根据征兵令进行整顿。文化开化的浪潮自然也席卷了武术界。火枪和大炮取代了剑，集体的力量取代了个人的力量。日本重建了大日本帝国这一国家体制，日本武术因为在实战中陈旧无用而被否定，欧美式的新型军事力量得到普及。

## 2.2 统一的组织机构下始创的武道

1896年，大日本武德会成立了。其目的是，鉴于武道精神是为了涵养古代至今的大和魂之美——即武德，每年举行祭典，讲习武道。而武道主要采用了剑术和柔术。1905年，大日本武德会设立了武术教员养成所，以培养后继者及学校的教员，致力于武术的传承与普及。

柔术的中心是嘉纳治五郎在1882年创建的讲道馆柔道。嘉纳治二郎热心教育，精通运动科学，擅长英语，很早便开始考虑向全世界普及柔道。嘉纳认为柔道是世界共通的优秀身体技法，通过学习该身体技法，儿童的精神面与道德面都可以得到锻炼，因此他开创了并非教授杀人之技，而是教授人的生存之道的讲道馆柔道。

大日本武德会的剑术并不像柔道这样有新建的组织或者成体系的招数，因为江户时代便已存在剑术流派与组织，便将主流派的招数集中到一起，创建了统一的招数。

而在大日本武德会之外，统一武术的还有学校教育。学校体育能否采用武术，考量的是其有效性。慎于在学校体育中采用武术的永井道明，提出了为了实现重视精神面的身心锻炼，应将武术转化为武道。之后，1915年东京高等师范学校设置了由体操、柔道、剑道三个科目组成的“体育科”。1919年上述的武术教员养成所改称为武道专门学校，由此可见当时“武道”这一用语和概念已经形成并普及。

1931年，中学校令施行规则改订将武道设为必修。在此条文中，武道中的剑道与柔道列为体育必修科目，剑道和柔道是“我国固有的武道，适合涵养质朴刚健的国民精神，锻炼身体，因此将两者或其中之一设为必修。”必须注意的是，这里所说的“国民精神”是军国主义政策下的精神。“武道”是在带有强烈战争色彩的政策下以吹捧其有利性的形式制造出来的概念。这便是说，武术的精神被军国主义所利用了。正因如此，随着1945年战争结束，民主化政策的推行，武道活动便被禁止了。

## 2.3 作为国际竞技运动的 BUDO

第二次世界大战后的民主化政策下，武道活动被禁止。不过，柔道很快作为竞技运动之一得到活动许可。这可以说嘉纳治五郎从最开始就着眼于培养身心，将柔道作为竞技体育向全世界普及的功劳。1948年欧洲柔道联盟建立了。全日本柔道联盟建立于1949年，并加盟了竞技运动的总组织——日本体育协会。之后，1950年得到驻日盟军总司令的许可，作为

竞技体育项目，学校体育采用了柔道。由此也出现了选择剑道作为竞技体育项目的人，创建了全日本挠（SHINAI）竞技联盟。1951 年日本与以美国为中心的西方国家缔结了“旧金山和约”。由此，日本文化相关的活动得到了许可，剑道活动也得以重新开始。

柔道在 1964 年的东京奥林匹克运动会作为竞技项目采用以来，成为名副其实的国际竞技运动项目之一。1970 年国际剑道联盟成立，并举办了世界大赛。武道作为国际竞技运动 BUDO，走向全世界。

### 3. 武术的理想境地

如前所述，日本的武术反映着历史背景，逐渐演变成今天的样子。接下来，我会跟随江戸时代的武术家与思想家佚斋樗山的论点，探索这些武术共通的理想境地。

佚斋樗山从武士的职务隐退之后为了便于向自己的孙子说明武术的精髓，创作了一些小故事。而其中之一，便是借猫之口道出剑术本质的《猫的妙招》。

某座房子中出现了很难对付的老鼠，三只富有捕鼠经验的猫试着捕捉，但都失败了。第一只猫敏捷年轻，既有捕捉老鼠的无敌技巧，又很机智。第二只猫体形巨大，力大无比，凭气势便可令老鼠悚然而立，轻易捕捉。而第三只猫既有技巧又有气势，并且懂得隐藏敌意，以平和的心境引诱老鼠并捕捉。但便是这样的三只猫，对这只老鼠却是束手无策。不过，之后出现的老猫不经意地接近老鼠便一下子捉住了它。

于是，这三只猫便向老猫请教妙招。老猫便教训它们说，黑猫是因见到了出乎意料的老鼠，虎皮猫是拼搏之心盖过了有意识地熟练使用之心，灰猫则是因为刻意平和心境而失去了自然的感觉，才导致了它们的失败。它说，稍微起心临敌，便流于刻意，失去自然，而这便是不成熟。

例如，对方先出手，再使用技巧。如果已经准备完善，那是便不是意识到接受对方的攻击，而是去迎合对方的攻击。不是使用技巧，而是通过接触让技巧自然地产生。本来，既不知道对手的攻击方式，再加上对方的速度相当快，出手水平高，没有办法按照自己的预想接受攻击。因此，只能让自己的身体准备好，对对方的攻击作出反应，施行技巧。正确地准备，让自己的身体产生无意识的反应，技巧也就自然产生。

佚斋樗山在《天狗艺术论》中指出“胜负在于应用的痕迹”。他指出拼命练习，锻炼身体，尽可能多地修习技法，进行有差异的重复的必要性。并且，他认为只有成为自然体，身体才能从真正意义上随机应变，作出回应。也就是说，有意识地修习正确的技法，驱动无意识，作好对战准备，胜负的结果便由技法的痕迹感知。

武术的理想境地并非百战百胜，所向无敌的强大。而是不设想敌人的存在，除去下意识

的自我控制，由此而产生的“无敌”——无敌无我的状态。

#### 4. 结论：生存的智慧

武术是无限地区或历史，在人类活动中产生的文化。可以说，人类的历史因为重复的战争而不断地被改写。而武术便是处于其中心的技术。并且，在人类活动中，人们经常移动——旅行。旅行的目的各种各样，有狩猎采集，信仰，交易或者战争等。旅行的过程中也会遭遇危险，所以必须掌握相应的防身术。修习大量的技法，达到一定的程度后，技法的精髓得到提炼，省去无用的技巧，身体转化为自然的状态。掌握一个又一个的技巧，身体不因经过锻炼而变得死板僵化，而是变得灵活，可以应对各种情况。并且，感知对手与自然的感性也得到了锻炼。

因此，我认为武术是通过旅行，战争，多彩的自然环境等领域中的行动获得的“生存的智慧”，孕育出的文化。正因为如此，无论是作为竞技体育，还是武艺文化，练武的身体总是生气勃勃。

在这里，不是作为近代推进的主体控制，向理想的“身体 = 作品”改良的手段的武术，有定为询问活的主体的机会的武术。

但是，武术在历史上也曾作为杀戮的技术，背负着负面的过去。有志于武术的人，切不可忘记武术有对身体技法的追求及其可能性，同时也有并非生存之技，而是杀人之技的两面性。

在科学技术和医学发展带来的“不死”时代，关于武术的重要性的现代问题已经出现。关于这个，2020年8月在国际体育史学会和日本体育史学会共同主办的讨论会「考虑为“不死的时代”继承武术的意义」问题提起，我想对此进行进一步讨论。